

# 「パネルディスカッション」

## 〈テーマ〉 一撰関期における、馬と帯の持つ意味—

◇パネラー：倉本 一宏、飯沼 清子、進行役-相内会長、 ◇司 会：高澤 聡

高澤「これから、倉本・飯沼先生に、相内会長を交えたパネルディスカッションを行います。尚、会場の皆様からご質問を受付ける時間を設けます。ご質問のある方は、挙手を持ってお知らせ下さい。係員がマイクを持ってお伺い致します。それでは、パネルディスカッション進行役の相内会長にマイクをお渡し致します。相内会長、よろしくお願い致します」

相内「それでは、パネルディスカッションの部に移らせて頂きます。一応、今フォーラムは、副題と致しまして、一撰関期における、馬と帯の持つ意味—ということで、只今、お二方の先生には、道長の時代を含めた撰関期において、馬と帯がどのような価値を持っていたかという点について、ご講演頂きました。

ここからは、この機会を通しまして、特に倉本先生は大変お忙しい方なので、私が常日頃、先生が講談社学術文庫からお出しになりました『現代語訳-御堂関白記』を読ませて頂いて、お聞きしたかった二～三の質問を、まずはして見たいと思います。また最後に、会場の皆様からご質問を受けたいと思います。

それではまず最初に、『御堂関白記』を読みまして、一番先にお聞きしたかったことは、この日記とは、道長の備忘録なんですか？」

倉本「そうです」

相内「そうすると、飯沼先生ともお話ししたんですが、馬と帯の“貸した”とか“作ってあげた”とか、“もらった”とか“誰々に渡した”とか、そうした記述が非常に多いところから、その辺のところからお二方の先生に、まず最初に感想をお聞きして見たいと思いますが、その持つ意味とは意図的なものなんでしょうか？ ただ単に記しているだけなんでしょうか…？  
まずは倉本先生からお願い致します」

倉本「道長さんという人は、非常に大雑把に見えて、実は政治の本質をものすごく鋭くわかっている人なんです。人に何かを貸す、もらう、誰かに何かをあげるということを『御堂関白記』にすごく詳しく書くんですが、それこそ実は、人脈をつくったりとか、それが一番大事なんであるということ、多分知っていて、先程、〔『御堂関白記』の〕裏書きについてちょっと話しましたが、でも、“誰が来たか”という出席者の名簿みたいなものと、“誰にあげたか”という目録みたいなものを、裏にまとめて書くことが多いんですよ。

それは主に、繊維製品が多いんですが、馬に関しては、“誰がどの儀式のためにくれた”とかいうことを、必ずくれた人の名前と身分を書きます。やっぱり彼にとって、この人は役

に立つ、重要な子分にしようということになるんだろうと思うんです。

それと、儀式の時に何かをあげるわけなんですけど、ほとんどは繊維製品で、袴(はかま)、桂(うちき)、布とか絹なんですけど、特別えらい人が来ると、“引出物”といって馬をあげる。馬を引き出すから“引出物”と言いますね。“大事な人間が来たら馬をあげるんだよ”ということも知らせなきゃならない。それも、政治的人脈をつくるために大事だったんだろうなと思います」

相内「基本的に道長は、“これは、人に見せるものではない”と言いながら、先生から前にお聞きした時に、頼通や後継者には良いと、お聞きしたような気がするんですが…」

倉本「え…、道長が生きていた時に、頼通にやったかどうかは分かりませんが、摂関内部で、嫡流の氏長者、大殿と呼ばれる人しか見られない。摂政・関白になっても、これは見られない。親父が生きると親父しか見られない。というものなんです。ですから、宝物というよりも、むしろ、御神体みたいな感じで、他の日記と全然違うものだと思います」

相内「有難うございました。それでは、飯沼先生、同じ質問でお願い致します」

飯沼「あの…、やはり、“道長から帯を借りる”という事が、大きい意味なんではないかという風に、日記を見てそう思いました。それは、お話の馬の事にも通じる感じがしてお聞きしたんですけれど…」

相内「有難うございます。

それでは本題的なところで、わが歴史研究会の仮説と致しまして、倉本先生のレジユメ資料〔ジャパナレッジ・オンラインデータベース〕にもありますように、“尾駮の駒”というのは、馬の毛色の斑“ぶち(駮)”という説に、私達研究会もその説に立っているのですが、どうも『後撰和歌集』『蜻蛉日記』『後拾遺和歌集』に出てくる尾駮の駒の詠い方を見ますと、やはり、注釈にもありますように、荒馬で駮(まだら)の馬でなかったかと…。そういうことから、私は非常に“駮馬”にこだわりまして、特に2008年の『六ヶ所村歴史講演』では、“駮馬”は日本の在来馬の系統でも無いんじゃないかとの説も聞いておりますが…。

早速、倉本先生現代語訳『御堂関白記』を探してみると、長和2年(1013)の4月23日条に、賀茂社〔現在の上賀茂神社〕に詣でた際に、突然の如く、その日の日記に「松尾社の神馬は鹿毛の駮であった」と書いてあるんですね。それで、先程の倉本先生の講演でもお話していたように、道長は馬に関しての記憶力がすごいとの話を聞いて、尚更、“鹿毛の駮”にこだわっていたのかな…?と。

実は、上賀茂神社の権禰宜の藤木さんにも聞いたことがあるんですが、上賀茂神社と松尾社は関係があるらしく、『延喜式〕〔「左右馬寮式」祭馬条〕によれば、賀茂社で使役した祭馬12疋の内、2疋は松尾社のものであるらしく、また、先生の現代語訳なされた『御

堂関白記』長和4年(1015)4月23日条に「神馬を永く献上した。これもまた、何年来の慣例である」とあります。

先程の講演で先生は、結論として、道長は牛馬の集配センターではなかったかと話しておりましたが、私も、全くその通りだと思うのですが、また道長が、人が「他所の馬に乗っているといっても、皆、これは元々は私の馬であったものである」〔寛弘5年(1008)4月16日条〕と訳しているところを、私も先生の現代語訳から探したんですが、ということは、“鹿毛の駮”も自分の馬だったとか思っていたのかなあ〜と読んで見ると非常におもしろく、“尾駮の駒”の歌意が“駮の荒駒”言わば暴れ馬ですから、先程の講演で、先生が話していたように競馬(くらべま)の特徴が正しく、そういった暴れ馬を必要としていたという事は、この辺は大変おもしろい記述だなあ〜と…。

実は、藤原実資の『小右記』の方にも、尾駮の駒を詠った兼家〔道長の父〕が摂政になった翌年〔永延元年(978)3月16日条〕に清涼殿において“駮一疋”を御馬御覧させているんですね。八歳になった一条天皇に見せているんです。

また兼家は、道長同様、<sup>※</sup>乗尻〔近衛府の官人〕が暴れ馬を乗りこなすことを重要視していて、『小右記』によれば、永祚元年(989)2月に、近衛府の官人が暴れ馬を乗りこなしたことによって、<sup>※</sup>府生(ふしょう)に任じているんですね。

こういった事を考えますと、私達、当研究会の仮説から言いますと、やはり、充分にその駮馬等の事例からも、それが、すぐには直接“尾駮の駒”と決定づけることにはならないんでしょうが、こうした背景から、そういった部分での関心が充分あったのではないかと考えているのですが、先生はどうでしょうか…？

“尾駮の駒”の特徴とか、“競馬(くらべま)”という事に関して、どのような感想をお持ちでしょうか…？

〔※「乗尻」…騎手、「府生」…官人の役職名〕

倉本「私は、馬が苦手というか…、よくわからないんですけど…。もう一つ、おもしろい例をまずはお知らせ致しますと、長和元年(1012)2月3日に、「はやる馬」って表現があるんです。それは〔講談社学術文庫本『御堂関白記』〕現代語訳ですから、「はやる馬」って書いてあるんですが、原文が「はやる馬」と、道長としてはめずらしく仮名で書いてあるんです。

「はやる馬」とは、おそらく“暴れ馬”。その意味でおもしろがったという記事ですね。やっぱり、彼らの中に暴れ馬をうまく乗りこなす、“ロディオ”っていうんですか、それをやる技術というのが一種伝わっていて、<sup>※</sup>隨身(ずいじん)達に伝承されていて、それをまた喜ぶ貴族たち、遊びがあったんだろうと思います

〔※「隨身」…護衛する人〕

相内「で、おもしろいのがですね…。この記事には、三条天皇が「東宮〔敦成(あつひら)親王〕に、左馬寮の交易した黒馬を賜われた」とあるんですが、“交易した黒馬”ですから“陸奥交易馬”、陸奥国の馬ということになりますよね。この辺も、非常におもしろいな…と。

それで、前に当会顧問の先生に聞いたんですが、本当にですね、“駮馬”を競馬に出したという記録で残っているのは、ずうっと後の奥州藤原氏の三代-秀衡の時に『兵範記』〔仁安2年(1167)10月26日条〕に、京都の馬場御所において、秀衡の名で送り出した“駮馬”

が競馬で勝ったという記事があるんですね。

まあ、そういったことから、何とか、道長の時代にはないものかな…？と、思って探したんですが…。直接的な記事は見つけれませんでした。非常に“尾駁の駒”が活躍していただろうなという背景が感じられるな…と、改めて、本日の先生のお話を聞きながら思わせて頂きました。

それともう一つ、今度は、飯沼先生にお聞きしたいんですが。

実は、この“尾駁の駒”を詠った兼家の話で、歴史物語『大鏡』がありますが、この歴史物語というのが、どの程度の信憑性があるのかわからないんですが、先生の先程の講演から致しますと、やはり、背景があつての物語と考えた時にですね、<sup>※</sup>雲形という名高い石帯は、兼家公が三条院にとくに献上なされたものです”とあって、あの三条天皇（当時、皇太子）に“雲形”という石帯を献上していますよね。先生は、この話を、先程の講演のお話から致しますと、どういった感想をお持ちになりますでしょうか…？」

飯沼「（少し、笑みを浮かべながら…）あの…、禎子（ていし）内親王に渡った“雲形”の帯ですね。

女性でもそういう石帯を譲り受けることがあるのか…という事を、今の雲形の帯の話と室町殿のところには在った実頼〔実資の祖父〕から譲り受けた玉帯を、実資が取り出したという話から、やっぱり家の宝としての機能が、男性でなくても、女性でも譲渡されるものであったということだと思います。

そうすると本当に、血を継ぐ者の、受け取ったその者によって、祖先との“絆”と言ったら、言葉としては軽いんですが、そういうものを譲り受けさせるという、結びつきというものを感じたんですが…」

〔※『大鏡』第四卷「兼家-七」一兼家、皇太子（後の三条帝）に雲形の石帯を献上する一に、この石帯は兼家公が、三条院にとくに献上なされたもので、「それには、鉸具（かこ）の裏に“東宮にたてまつる”と、小刀の尖（さき）で、ご自身の手でお書きになったものです」とあり、「この御帯は、現在では一品（いっほん）の宮〔禎子内親王〕のお手許に伝わっている」とある〕

相内「それで、先程の先生の講演で非常に興味深いお話がありまして…。“通天の帯”という事についてですが…。“天に通ずる帯”、“霊帯”であるということに関してですが。

実は昨年も、このフォーラムを開催しているんですが、その時いらっしゃった、（公財）埼玉埋蔵文化財調査事業団の田中広明先生は、考古学の先生なんですけれども、初めて六ヶ所に来て、この表館遺跡出土の本物の“鈍尾（だび）”を見て、もしかしたら…、まだ感想の段階ですが、これは『延喜式』にある“瑠璃御腰帯”〔の一部〕じゃないかと…。田中先生は最初、馬の脳のイメージから“瑠璃御腰帯”の色を、赤とか青色を想像されていたらしいんですが、ひょっとしたら、“白瑠璃”があるんじゃないかと話されて、次に言ったことは、会場の皆さんも、あの石帯を見てわかるかと思うんですが、赤い筋が入ってい

ますよね…。これは、だてに入っているんじゃないかと発言されました…。そこで前に、飯沼先生に聞いたような気がしたんですが、大宰府で見つかった、菅原道真の帯か…？とされている“白玉帯(鉦尾)”を見たことがあると言われませんでしたかねえ…？」

飯沼「いいえ、違いますねえ」

相内「そうでしたか。

田中先生曰く、本当に真っ白い素材でよければ、タイルのような白いものだけを使えばいいんで、その時に引き合いに出されたのが、正倉院に残っている聖武天皇の残闕(ざんけつ)の帯のことで、その後、私も調べてみたんですが、これは“ヤコウ貝”のまだら模様の素材を活かして作っているんですね。田中先生は、ただ真っ白いものだけでなく、こうした模様のあるものを使用しているということは、それなりに意味があるのでは…と話ししていて、また、田中先生との昼食時に出た話なのですが、これらは景色として見ていたのではということなんですが、今日のお話ですね…。飯沼先生の“通天”という意味が非常におもしろいというか、なるほどな…と、思わせて頂くんですが。やっぱり、太陽、星、雲、月、花、山水の風景などに見えるような素材とかは、やっぱり大切にしたんでしょうか…？」

飯沼「“犀(さい)”という素材ですか？」

相内「“犀”というか、そういう“通天”とされる素材ですね…」

飯沼「そうですね…。本当に、その“犀”の帯の、特に模様のあるそういった断面とか、全く見たことがないので、だから私のは、その文献に出てくるものからの想像でしかないのですが、こういう風に、色んな模様が書かれているということは、恐らく何かしら似たような形のものが現れていて、やっぱり無地のものよりは何か形があると、人間は感じる本来の心があって、よりそういった鮮明な模様があれば尊んだとか、貴重なものとして見ようとしたとか…と、いう事ではないかと思うんですが…。

ですから、まだきっと、何処かに素敵な模様のある帯の石が眠っているかもしれない…。そういう風にロマンを掻き立てられます」

相内「そうですね。正しく、この馬と石帯は当地にとって、とても象徴的であり、そして、その価値ですよ…。この辺であれば、当時から他の特異な作物が育つ処ではないので、交易品としての馬、そして、それと並び称される位の石帯の価値というものを併せ考えると、益々、当地の歴史ロマンへの探求に、心躍らせてくれるには十分な素材であると思います。

今後も、決定的な証拠というものが出てくる可能性は低いと思いますが、それでもまだ、古記録などからも、まだまだロマンを感じさせてくれる話があるのではないのでしょうか…？」

それではここからは、折角ですので、会場の皆さんからも、今日お出で頂いたお二方の先生に質問して見たい事がありましたら、どんなことでもろしいですよ？」

飯沼「お応えできることであれば…（笑み）」

相内「どうでしょうか？」

高澤「マイクを持ってお伺い致しますので、遠慮なく、手をお上げ下さい」

### 〈会場からの質問〉

伊藤「十和田市の伊藤〔当研究会顧問〕ですが、『御堂関白記』を私も随分読ませて頂きました。その中で、ちょっと気になったのは、藤原氏のいわゆる陸奥の中に、自分の、藤原氏のいわゆる、牧というものを持っていたのでしょうか？ 持っていなかったのでしょうか…？ どうもそれがはっきり出て来ないので、倉本先生のお考えをお聞きしたいと思います。

その事が一つと、それから両方の先生に関わるんですが…。いわゆる、散文では“馬”という表現で出て参ります。ところが、歌の中、短歌の中においては“駒”という表現が非常に多いですね。じゃあ一体、“駒”という表現は、歌の中では“駒”と言い、散文では“馬”という、この意識の違いはどこから出て来るのですかね？ 参考意見としてお伺いできればと思います」

倉本「『御堂関白記』を読んできたキャリアは、飯沼さんの方が長いんですけど、僭越ながら、私が答えさせていただきます。

藤原氏自体が牧を持っていたのは確実なんですけど、場所が分かっているのは“楠葉(くずは)の牧”というところです。楠葉ってところは、淀川沿いの京阪で楠葉駅ってところがあるんですけど、ゴルフが好きな方は、その楠葉国際何とかってところを通るんですけど、天王山の向かい側の楠葉、そこに牧がありました。多分、それは、淀川沿いの河川敷だと思うんですけど。今は楠葉パブリックゴルフ場の辺りだと思うんです。

それで道長はですね、馬が必要な時には、すぐに出して来てあげるんですけど、ということは、うちの中にそんなにストックいっぱい置いておけませんので、何処かものすごく近い処に馬がストックされていたに違いないと思うんです。で、楠葉ってところは京阪で、要するに、町で言えば枚方市にあたるんで、結構遠いんです。

ですから、楠葉から都までの何処かに、道長専用の牧があって、そこから持ってきていたのではないかと。じゃあ、産地の方は何処かということ、中世はわかりませんが、多分、摂関期だったら持っていなかったと思います。つまり、自分で直営の牧を経営するよりも、国司に命じて、何頭持って来いと言った方が絶対早いし楽だし、で、問題なのは、国司が、例えば陸奥守だったら、陸奥国の牧、勅旨牧を管理しているんですけども、それとは別に国司が管理する牧があったのか？ でも、それよりももっと考えられるのは、朝廷の牧

だけれども、これは朝廷の分、これは道長とかにあげる分とって、馬を分けていた可能性、或いは、そこから出す時に馬を、多分、良いやつは道長さん用、大したことないやつは天皇用と多分、分けていたのではないかと思います。

撰関家が陸奥に牧を持っていた可能性は、低いと思います。

もう一つは、“駒”の問題ですけど、これも僭越ながら、続けてお答えさせていただきます。

日本には元々、馬は居なかったです。従って、馬を表す日本語はない。馬というのは訓ではなくて、音なんです。おわかり頂けますか。訓というのは日本語ですね。音というのは中国語ですね。日本人は馬を見たことがなかったので、“これは何か”と聞いたら、中国語で“ma” “ma”と言われたんです。で、それを“uma” “muma”もしくは“uma”と言って、それが日本語であるかのように、訓でやっていますが、実は音の“ba”と“ma”及び日本語の馬は同じ言葉であると…。じゃあ、なんで“馬”っていうかというんですね、日本人の大多数が最初に馬を見たのは、多分、西暦にすると、恐らく 400 年、高句麗と戦争した時だと思うんですね。で、それ以前にもあちこちで居たかも知れませんが、大量に見たのは、多分、その時が初めてで、高句麗まで渡って戦争して殆ど全滅状態だったんですね。

で、それはなぜかという、日本は歩兵だったけど、高句麗軍は騎兵だったんです。古代において、騎兵ってのは一番強い軍隊です。特に、馬の上から弓を射る一番強い兵隊ってことになってます。で、高句麗に全滅して、あいつらは“あれっ、何に乗っているんだ”という事で、“高麗(こま)”と言われたというのが定説です。

だから、高句麗から来た人たちが住んでいる湊だから“狛江(こまえ)”とかですね、高句麗から来た人たちが住んでいる沢だから“駒沢(こまざわ)”とかですね、あれは高句麗から来ていると思います。だから、日本人がその～、最初の内はですね、高句麗の動物が“駒”。で、名前はなんてんだ…、“馬”。と言ったかと思いますが、いつ頃まで、そうした意識があったのかどうか？ あれは、高句麗のものだよ～という意識だったかどうかはわかりませんが、平安時代には多分もう、恐らくそれも気づかずに、あれは元々、日本で“駒”と言ったんだよというような感じで使われていたんだと思います。

元々は、そういう意味だったという事をお知りおき頂きたいと思います」

伊藤「え～っとですね。補足しますとですね…。私が聞いているのは、歌・短歌の中では“駒”、普通の散文の中では“馬”なんですよね。この意識の違いをお聞きしたいと思ったんです。それからですね…。実は、この上北地方では、“駒”というと、雄駒(おすごま)のことを“駒”と言います。それから、雌駒(めすごま)のことを“駄”と言います。“駄”、荷駄の駄ですね。

ところがですね、例えば、『大鏡』なんかを読みますと、“駄”という言葉が出てくるんですが、その“駄”については、注釈の中で、「これは悪い馬だ」というふうに書いているんですね…。ところがそれは、私達から言いますと、明らかに間違っているんです。

いわゆる雄駒は、上馬として戦闘力に使う。だから“駄”というのは運搬用に使うんで、主として私達は駄馬(だば)ではなく、“駄馬(だま)”と呼んでいるんですけどね。“駄”＝運搬用に使う馬だというふうには考えています。

ですから、そういうこの辺の言葉の使い方から見て、一体、歌に“駒”と言ひ、散文の中には“馬”としか言わないという事について、違和感があったものですから、その辺をお聞きしたかったわけです」

相内「どうも、有難うございました。それでは、飯沼先生、よろしくお願い致します」

飯沼「私も厳密に、そういう点から調べたことがなくて、今、ちょっと驚いております。ただ、え〜と、“駒”に対して、“駒”が雄馬で、“駄”が雌馬。決して、駄目な馬ではないという事に、そこにはちょっと、共感を持っています。

と申しましたのは、非常に勢いがある、高く足を蹴り上げることのできる、いわゆる、そういう能力の高い馬を<sup>※</sup>“騰がり馬”と言ひまして、“騰がる”は、沸騰の“騰”という字、水が沸いて沸騰するの“騰”の字ですね。その字を書いて“騰がり馬”というふうに表示するのが、時々古典の中に出て来まして、本当に、その注釈などを見ますと、“争(あらが)い馬”“気の荒い馬”“暴れ馬”というふうに表示しているのが多いんです。でも、色々な“騰がり馬”の様子を表現から追いますと、ただ単に“騰がり馬”で手こずるといった、そういう馬ではなくて、非常にその身体能力の高い、高く蹴り上げることのできる馬を“騰がり馬”っていうことなんです。そういうことを、ちょっと調べたことがあります。

ですので、少し誤ったと言ひますか、解釈が少し足りないことで通用してしまっている現象というのが、今の世の中にあつて、それが自然に広まってしまっているのではないかと思える事が、馬についてありました。

ですので、今のご指摘、教えて頂いたことも、私の感じた“騰がり馬”の誤解というものに通じるんでしょうか…？ そういう思いがして、感心して伺ったんですけど、いかがでしょうか…？

〔※「騰がり馬」…これまで読んだ文献では「揚馬」「上馬」という表記がほとんどだった。(圧倒的に多かった)〈訂正〉飯沼〕

相内「よろしいでしょうか？ 有難うございました。後、どうでしょうか…？」

高澤「只今、極めてレベルの高い質問が出されてしまいました！ もっと、え〜、初歩的と言ひますか、素朴な疑問、結構でございます。どうぞ遠慮なくお手を挙げて下さい」

高田「六ヶ所村教育委員会社会教育課の高田と申します。飯沼先生にお伺ひします。

まず、恥ずかしい話なんですけれども、『うつほ物語』というものを初めて聞かせて頂いて、とても楽しく聞かせて頂きました。特に、北の方という50代の女性が10代の美少年に思いを寄せるなんていうのは、すごいショックでして、しかも先生が、そのレジュメの中に黒いハートをつけるっていうのが、また、その先生の心の豊かさを見ることができて、とてもうれしかったのですが、本来、こういった歴史とか文学というものは、今、先生が作



られたように、もっと人間臭いと言いますか、そういったものだと思うのですが、僕が学校で教育を受けた歴史の教育というのは、まあ 90 年代から 2000 年の初めだったんですけども、もっと無味乾燥と言いますか、例えば「1192 年に鎌倉幕府が始まりました」的な、そういう、ただただ暗記してくるもので、全く歴史や文学に興味を持たずに来ました。ただ、その僕らが歴史に興味を持ったのが、この“信長の野望”というテレビゲームがあったんですけども、そういう学校教育以外のところでは、歴史に興味を持っていたんですが、そこで二つお伺いします。

まず先生が、この平安文学を研究しようと思ったきっかけは何だったのかなあ～という事が一つと、もう一つは、その学校教育の中の歴史教育に、今の北の方の話みたいな、主観的など言いますか、人間臭いというか、そういった教育を盛り込んでいくことについて、どういった印象をお持ちなのか、この二点について、お伺いしたいと思います。

飯沼 「はい。え～と、最初、後者の方から。あの～、歴史も全て人間が作って来たものだと思うんです。で、私はそういう、人の心というものを大事にしたいと思うんです。ですから、学校教育の中に、例えば、歴史上の人物がこういう話で通じているけれども、実はもっとこういう面もあったんですよ。というふうなことを、もっとこう豊かに話せるような教育現場が展開されていれればいいと、私は思っております。一つは、そういうことでよろしいでしょうか…？

次に、私がなぜ、平安文学を志したかということは、どこでもよく聞かれることですが、そうですね…。そんなに大層なきっかけというようなものはないんです…。本当は中世文学を研究しようかと思ったことが、ちょっとありました。それで、『徒然草』とか『方丈記』とか、何か、そういう隠者の文学を究めてみたいと…。でも、そこまでは思いませんでしたけど…。何か、何となくそちらを読もうかな？とっていたことはあったんです。それは、大学に入る前のことでしたが…。

で、國学院大学に入学しまして、たまたま、同じクラスに“王朝文学研究会”というところに入会して勉強している人が、二人居りました。それで、その人たちの様子、話を聞きますと、何でも『源氏物語』を読んでいるらしいとのこと…。『源氏物語』について、私は知識も全く無く居たんですけども、どうも、ただ単に男女の話が書かれているわけではないらしい。もっともっと色んなことが書かれているのであろうというふうな事を、友人から聞きました。そんなことがありまして、たまたま研究会に入会したところが、そういう『源氏物語』を勉強する、そういう集りだったんです。で、その“王朝”という言葉に、非常に心を惹かれてしまったのです。どんな人たちが居るかも知らずに、偏に“王朝”という言葉に惹かれて…。私は村の出身です。群馬県の…。それが村ではなくて、しかも、古代の貴族たちが、“王朝”という、天皇を中心としたそういう世界ですが…。階級社会なんですけれども…。ただ偏に、王朝文学がというところに心を惹かれたのが、まあ、大きな原動力となったんです。

確かに勉強して見たら、非常に深くて広くて…。これはただ文章を読むだけではないというふうに思ったのは、実は、大分後ですけども…。

え～、それで、縁がありまして、倉本先生の行ってらした古記録の会へ参加するようになったのは、大分それよりも後ですが…。その中で、その歴史史料というものを、たどたどしくではありながらも読みつつ、尚且つ、その文学作品というものを読むために、実際的なその古記録の世界を読んだら、それがもっともっと、心豊かなものになって行きそうな気がしまして…。そういう意味では、未だに離れられずにいるわけです。

『源氏物語』を、初め、ずう～っと読んでいたんですけど、『源氏物語』を読むためには、他の物語も読まなければいけないと、“あなたは、幅が狭すぎる”という、こう色んな意見を頂いて、まあ、自然自然、目を色々なものに通すようになった次第でして…。ですから、平安文学を研究しようとしたのは、これゆえにという学問的な理由ってのは無いんですけども、若い学生の時に何となく感じたその王朝文学という言葉に惹かれて、今日があるという感じなんですけど、いかがですか？」

高田「有難うございました」

高澤「はい。それでは、次の質問がある方はどうぞ」

水野「〔当歴史研究会員〕あ、どうも、お二人の先生方、今日は、貴重なお話をどうも有難うございました。私は、歴史に興味があるもので、今日、参加させて頂きました。

えー、まずは、飯沼先生にですね、初めの頃に仰られた、『うつほ物語』の忠こそが出奔・出家した原因となった、一条北の方の最後の…、要するに、最終的にどうなったかというお話を、まだ伺っていないと思うので、そのお話を伺いたいというのが一点です。（会場笑い）

二点目は、倉本先生にお聞きしたいんですけど、結局、この『御堂関白記』で書かれたことを、次の息子の方に伝えたかったという事は、道長として何を伝えたかったのか…？例えば、“最高権力者になると良い事があるんだよ”という事を言いたかったのか？ えー、“最高権力者になるには、努力がいるんだよ”という事を残したかったのか？ この点をお教え頂ければと思ってます」

飯沼「はい。何か、北の方の末路がどうなったかというところで、どうも皆さん、関心をよせたようでして…。実は、そういう質問とか来ないかな？と、用意してあったんです。（微笑）これは、あの一『吹上』という巻がありますが、そこに実は、北の方が思っても見ないような格好で出てきます。

えー実は、北の方は、自分の夫であった左大臣の源忠常から譲り受けた財産と、自分の生まれた家の財産を一手に貰いまして、ものすごいお金持ちになったんです。で、二人の千蔭親子を自分に籠絡したいために、この財産をどんどん使うんですね。で、お金でもって愛情を買おうという、そういう醜い心があつてですね、で、忠こそをこんな目に遭わせていたわけですが、その『吹上』の巻に、忠こそが偶然に出会う場面が出てきます。

ちょっと、その場面は忘れたこともあり、いい加減な記憶なので申せないんですけど、そ

ここにこういうふうを書いてある…。 “顔は墨より黒く、足、手は針よりも細くて、継ぎの布のわわげたる” 継ぎはぎの布で、ボロボロになったものを着ている。そして、“鶴はぎにて” 鳥の鶴の足のように細い足が出ていて、着物もボロボロで短くて、顔は真っ黒で痩せこけてという、非常に、あの財を手にした一条北の方か？というふうには、姿が変わり果てて忠こその前に現れるのです。

忠こそは、真言院の律師となっていて、で、そしてですね…。何と、その忠こそに“今日のたすけたまへ”、私を助けて欲しいと懇願した！ それで、忠こそは、どうも見ると、そう命も永らえそうにもないと可哀想に思って、北の方を救って、そして最後まで面倒をみたということらしいと出てきます。そういう憐れな末路が描かれている。あの黒いハートは、やっぱり良くない…。(微笑) そんなことで、よろしいでしょうか」

倉本「道長は多分ですね。自分が死んだら全部焼くようにと、遺言して死にたかったと思うんですね。あの～、自分で出家して後、みんな焼いちゃった人も後にはあるんです。だから、伝えるための日記と焼くための日記があったはずで…、人によっては、中世ではですね、二種類の日記を毎日書いて、こっちは伝える、こっちは焼くつもりで書いてたのを、残念ながら、両方残ってしまった人も居るんですけどね…。

道長は多分ですね。まあこれ『御堂関白記』は、全部焼くようにというふうには、あの～、遺言し忘れて、それすらできないくらい苦しくて死んじゃったと思いますが…。まあ～、後世に伝えようとしたとしても、多分、頼通だけだと思いますね。

あの～、彼、頼通だけ、ベタ可愛がりしてましてですね…。他の子供には割と冷たいんですよね。で、頼通だけ非常に大事にしてまして、何を伝えたかったか？ 結果論になりますが、どういう儀式には、どういう身分の人に、何を、どれだけあげるんだよ！ それは先例として、これからも、これだけあげなさいよ！という、えー、マニュアルの一つですね…。

もう一つは、この時は誰と誰が来ました！ 誰と誰が来ませんでした！と書いてありまして、そうすると、自分の代が終わって頼通の代になると、来た人の子供、来なかった人の子供が居るわけですよ…。そうすると、んー、お前の代になって、こいつとこいつとこいつは、俺のあの時に来なかったやつの子孫。こいつとこいつは、来てくれた人の子孫だということを伝えたかった…！ だから、将来の“派閥名簿”の基になるという気もあったんじゃないかな？と思ってます」

高澤「はい。では、最後の質問とさせていただきます。えー、いかがでしょうか…？」

鈴木「野辺地町の鈴木〔青森県文化財保護協会員〕と申します。え～と、お二方にお伺いしたいんですけど…。まずは、飯沼先生の方にお伺い致します。え～と、“高名の帯”という事で、ご講演頂いたんですが、あの～、先程の『宇津保物語』の中に出てくる帯の中で“烏犀(うさい)”という言葉があったと思うんですけども、“烏犀”というのは多分“烏(からす)の犀と書くと思うんですけど、どういう色の犀なのか、今一、よくわからないのですが…？」

飯沼「あの～、文字からすると、やはり、黒い帯ではないかと思います」

鈴木「で、その～、犀についてですが…。犀の中の世界とか景色を表現するとのお話だったんですけれども…。そのゾウとかサイとかというのは、古代の日本の人たちにとって、どういう意味合いを持つものだったのか…？というのを、もし、お解かりでしたらお教え頂きたいと思います」

飯沼「あの～、日本においてですか…？」

鈴木「はい」

飯沼「ちょっと…。えー、あの～、日本の文献で、あまり見たことがないので…」

鈴木「いやー、実は私、江戸時代の事をちょっとやってるんですが、“烏犀図(うさいず)”というのがよく出て来るんですが、商売の取引の中にですね。で、その“烏犀図”というものを見たことが無いもんですから…。たまたま今回、帯の中に、“烏犀”の石帯ですか、出てきたものですから、ちょっと聞いて見たいなあというふうに思って、質問いたしました。それが一点。それから、倉本先生に質問があるんですが…。

あの一、『御堂関白記』が、その～、道長自身のメモ帳という言い方は変かもしれませんが、日記というよりも、彼の備忘録みたいな感じではないかなあという気もするんですが、もし、そうであるとするならば、四行五行で書いてあるのはいいとして、先生が先程仰ったように、あの～、競馬の件が、非常に詳しく書かれているというお話なんですけれども、その競馬ってのは、それほど道長が興味を持って見ているとすれば、その競馬ってのは、具体的に、どこの馬を使って、どういう方法でやっていたのかということが、よく解かる資料とかがありましたら、教えて頂ければと思います」

相内「あの～、実際にですね、これ～、実物はホールの外フロアの展示資料にありますように、現在は、上賀茂神社でしか見られませんので、ただ先程、先生も言ったように…、こう、二レースで行った時に、掴みあったり、本当に相手を落としたり、もう曲芸に近いやり方をするって言ってたんですけれども、あの～ここにですね…。実は、上賀茂神社の競馬の、うちの会員でもあるんですけれども、乗尻の岡本さんが居るんですが、その辺はどのように聞いているのか？ ちょっと、お話頂ければ有難いんですが…？」

あの～、彼はいつも、毎年5月5日、上賀茂神社で馬に乗って走っていますので…」

岡本「今、会長の方からご紹介頂きました、岡本〔当歴史研究会員・上賀茂神社の競馬乗尻〕と言いますが、私はあの～、毎年、上賀茂神社で競馬とか乗ってるんですけれども、え～と、昔はですね、あの～、先生からもご紹介あったように、競馬でも掴みあったりして、どうにかして勝つと、とにかくルールが無かったと…。ただ、今、現在やっている儀式ではで

すね…、今はやっぱり危険が伴いますので、やはりそこまではしていないという感じでやっています。要は、掴みあったりとかはしないで、馬を走らせているといった感じで、現在は残しています」

鈴木「現在の競馬の状況ではなくて、その～、平安時代の競馬、例えば、競争だけじゃなくて、組み合いしたとか、或いは、当時の馬っていうのは今とは違って、背が非常に低かったというふうに聞いてますけど、どういう馬に乗って、どういう思いがあったとか…？ その辺のところが、さっき先生が、あの～、絵図を見せて頂いたんですけど、そういう類のものが他にも無いのかなあ～？と、思いまして…」

倉本「えっと、ね…。中世になると絵図は残ってますが、古代は分からない事が多いんですよね…。で、あの～“儀式書”っていうものがありまして、こうやって儀式をやるんだよという順番を書いたものがあるんですけど、いざ、スタートしてからゴールする迄で、間のやり方は書いてないんです。つまりそれは、貴族が残すものでなんで、貴族がこうやって運営して、こうやってスタートして、そればかりに関心があって、乗るのはやっぱり、乗り手がやりませんで、それは残ってません…。

だから『御堂関白記』とか、こういう今日、お配りした資料から推測するしかないんですが、え～っと、鎌倉くらいになりますと、競馬の家みたいな稼業が成立しまして…。この家は歌の家、この家は何の家と出て来るんです。そこで、例えば“秦氏(はたうじ)”、京都の渡来系の秦氏はやっぱり、競馬に堪能しますので、多分、家の中で伝わったやり方があると思いますんで、字には残さないで、それこそ嫡流に、この家はこういうこの技を出すんだ！ そういうのがあるんだと思います。それだから、残っていないんだと思います」

相内「先生、最後の質問になるんですけども、“下毛野氏(しもつけぬし)”っていうのは、やっぱり競馬をやる家、そういう家だったんでしょうか…？」

倉本「隨身になるような連中が、よくやったんです。だから、この氏だからというのではないと思うんです。“下毛野氏”って言っても、栃木から来たわけではなくて、ずうっと前に、都に住んでいた連中なんですけど、その後からは出やすい。あの下毛野公時という人も居るし…、だから、あの～、そういう身分の人がやるという事です」

高澤「はい。有難うございました。以上を持ちまして、ご登壇の皆様、どうもお疲れ様でした！ パネルディスカッションを終了させていただきます。お疲れ様でした！」

(大拍手)



## 「顧問挨拶」

六ヶ所村「尾駁の牧」歴史研究会  
顧問 栗村 知弘

栗村でございます。一応、顧問ということになっておりますが、なかなか、足を運べないでおりますが…。相内会長さんを中心に一生懸命頑張っております、こうして、京都と東京からお二方の先生をお呼びして、こういうフォーラムを開催できたことは本当に有難いことだと思っております。

この「尾駁の牧」歴史研究会と、それから、こういうフォーラムが開催できたきっかけと申しますのは、あそこに展示している「石帯」でございます。昭和47年、青森県教育委員会で“むつ小川原総合開発計画”の事前調査ということで「表館遺跡」の試掘調査を実施しました。その時、竪穴住居址の中のちょっと壁の高いところから、いわゆる竪穴住居ですから、壁の辺りは硬い訳なんです、そこから張り出していた高い部分にその「石帯」が載っていたということでもあります。

私も学生時代、平泉の「毛越寺」や「観自在王院」または、奥州市の「胆沢城」の発掘調査に参加してはいたけれども、「石帯」にはお目にかかっておりませんでした。ですから、出てきた時にはわかりませんでした。「これは何だ…？」ということになり、瑠璃なことは、瑠璃だと思わんですが…。また、裏をひっくり返してみると、糸を通すような穴が開いている…。「一体、これは何だ…？」と。我々は縄文土器だとか、そういうのは、専門に一生懸命やっていたからわかるんですが、正直言って本当にわかりませんでした。

そこでこれを、早稲田大学の桜井清彦先生と専修大学、後に教授になられた久保哲三先生、若くして亡くなりましたが、この先生方にお見せするためにむつ市まで持って行きました。そして、「北奥大文化研究会」と呼ばれていた、その研究会の会議の席に持ち込んだわけです。そしたら、「栗村さん、これ、奈良か京都で仕入れてきたの？」と。いわゆる、“骨董屋から買ってきたのか？”というわけです。「冗談じゃありません。むつ小川原の表館遺跡、六ヶ所村から出たんですよ！」と言うと、「えー!!」ということになりまして、「これは、何ですか？」と聞くと、「“石帯”というものなんだ」とお答えになりました。「“石帯”って何ですか…？」本当に何もわかりませんでした…。「そうしたら、伊藤玄三先生の『末期古墳』の中の「古代の銚帯について」の論文があるから、それを読めば、大体わかりますよ」と…。そして「大体の製作年代の上限がつかめるはずだから、その竪穴住居址の年代も、ほぼ特定できるんじゃないか」というお話でした。

それから、伊藤玄三先生の報告書、レポートのコピーを頂きまして、それを職員の皆で勉強し合って、「あっ、これが“石帯”というものなんだ」ということになり、これが、青森県内で発

見された最初の例でございます。

それで、この報告書が出た後、暫くは、この「石帯」については触れておりませんでした。それが、2006年ですか…。長野県の榊郷土出版社ら『図説 上北・下北の歴史』という、郷土に関する写真図録集が出ました。続いて『図説 三戸・八戸の歴史』が出版されました。これらは、青森県文化財保護協会の会員たちが、盛田稔会長を中心として手分けして、分担して書いたものです。その時に、「石帯」についても「やっぱりこれは、京都とのつながりがあるだろうから、是非、私に書かせて頂きたい」と話しましたら、「それじゃあ、君、書きなさい」ということになりまして、「石帯」の項につきましても、その本の中に収められることになりました。

その後間もなく、相内さんから電話がありまして、「栗村先生が書いている「石帯」について教えて頂きたい」ということになりまして、拙宅に足を運ばれるようになりました。そこからまた、六ヶ所村も中央とのつながりがあるんじゃないかという事で、勉強会を立ち上げたいと…。そこで、私と伊藤一允先生が顧問に依頼され、ここまで来たという訳です。結びつけたのは、何と言いますか、「石帯」あれ、一点です。あそこにある「石帯」こそが、今の研究会となり、そして、このように講師先生方をお呼びできた、何と言いますか、それこそお手柄の「石帯」ということになります。

様々な開発行為は在りましたけれども、この土地に誇りのあるものが、必ず在るはずですよ。それは“古くからの文化と歴史”だと、私は、こう思います。これを大事にしないことには自分たちをないがしろにする事と同じだと思います。それで、研究会の方々が一生懸命、研究されてここまで参りました。

昨年度は主に、考古学の先生方からご意見を賜りましたが、今年は、“文献史学の方面からアプローチしてみたい”との会長さんのお話でしたが、まさか本当に、倉本先生、飯沼先生がお出でになるとは、私は思っても見ませんでした…。お二方の先生方、本日は遠いところ、この地までお越し頂きまして、誠に有難うございました。きっと、あそこに在る「石帯」も喜んでいないかと、こう思っております。

現在、これは、六ヶ所村のものではございません。青森県埋蔵文化財調査センターのものでございます。八戸市では今、青森県の縄文遺跡群を世界文化遺産に登録しようという事で、その候補になっている「長七谷地貝塚」の遺物と調査記録一切、八戸市博物館で頂いております。できれば、自分たちで持っている文化財は、自分たちのところに置いて活用してこそ、意味があるんじゃないだろうかと、こう思います。村民の皆様、是非とも、そのところを考えて頂いて、今後の文化の向上に頑張ってくださいと、こう思う次第であります。

以上で、お二方の先生、並びにご来場頂きました皆様への御礼のご挨拶とさせていただきます。本日は、誠に有難うございました。

〈番外記述編〉「パネルディスカッション」の「陸奥の中における、撰  
関家・藤原氏の牧の存在について」への栗村顧問の感想（考察）

※時間の関係上、「パネルディスカッション」の一般質問の時間にできなかった、栗村顧問による、倉本氏への質問内容（“陸奥の中における撰関期の牧の存在について”の考察）が、「顧問挨拶」の中で述べられたので、当会研究テーマに関わることでもあるため、改めてここに別記する。

栗村「私も、ちょっと、質問したかったんですが…。時間が無いみたいですが、倉本先生に、一つだけ…とっております。

えーっと、確かに（陸奥に）、藤原道長の牧は無かったかも知れませんが、各地に荘園があったらと思う。ここから、馬が入って来ているんじゃないだろうか…？と。で、時代は若干違いますが、<sup>※</sup>“悪左府(あくさふ)”（藤原）頼長の時代になりますと、平泉の二代目、(奥州藤原氏)基衡(もとひら)との交渉がありまして、馬の足数と砂金の量と、それから、布の多い少ないの、いわゆる、荘園からの貢納物の場合ですね…、頼長に出す場合ですね。かけ引きをしているんです…。丁度、要求の半分程を、平泉の基衡が一步、引かせているんですね。(※次ページに、抜粋資料あり)

それを、地方の政権が、中央政権に対する“抵抗”だと、私は考えているんですが…。そういうことを考えると、何代か前の藤原氏の荘園の中からも、馬が相当数、行っているんじゃないだろうか…？と、こう思います。牧、そのものを持っていたかというよりも、荘園そのものを考えた方が良くないか…？と、こう、思っております。

〔※「悪左府」…平安時代末期の公卿で、兄の関白・藤原忠道と対立し、父・忠実の後押しにより、藤原氏長者(うじのちょうじゃ)・内覧として、旧儀復興・綱紀粛清に取り組んだが、その苛烈で妥協を知らない性格により“悪左府”と呼ばれた。自身の日記『台記』(『宇槐記(うかいき)』ともいう)でも有名〕

私もあまり、文献の事とかは分かりませんが、学生の頃、卒論に『中右記』『小右記』『宇槐記(うかいき)』を読まされまして、特に陸奥関係の馬について勉強させられて…。それで、卒論を書きました。

今日は本当に良いお話を聞かせて頂きました。私自身も勉強になりました。これからは、馬だけでなく、帯の方もありますので、『小右記』、帰ってから活版本ですけれども、一生懸命勉強したいと思っております。今日は、本当に有難うございました」



第18表 五莊年貢増徴係争表

遊佐	屋代	大曾禰	本良	高鞍	莊名
尻馬 鷺羽 金 一疋 三 五兩	馬 漆 布 二疋 一斗 一〇〇〇反	水豹皮 馬 布 二疋 二〇〇反	布 馬 金 別に預所分一疋 二疋 一〇兩 別に預所分五兩	馬 細布 布 金 二疋 一〇反 二〇〇反 一〇兩	当初の年貢額
				三疋   一〇〇〇反 五〇兩	忠実の提案
二疋 一〇 一〇兩	三疋 二斗 二〇〇反	 二疋 七〇〇反	二〇〇反 四疋 五〇兩	三疋   一〇〇〇反 五〇兩	頼長の久安五年の提案
一疋 五 一〇兩	三疋 一・五斗 一五〇反	五枚 二疋 二〇〇反	五〇反 三疋 二〇兩	三疋 一〇反 三〇〇反 一〇兩	基衡の仁平二年の提案
基衡提案の通り	基衡提案の通り	 二疋 三〇〇反	基衡提案の通り	三疋   五〇〇反 二五兩	仁平三年(二五)の妥結

〔抜粋資料〕 『北方の王者——平泉藤原氏——』（板橋源著 株秀英出版）（二七二ページ〜一七四ページ）